

## お世話になりました 13教授が教壇にお別れ

長年の間講義やゼミ、クラブ活動などを通して学生を指導し、研究活動に力を注いでこられた13人の先生が、定年で教壇に別れを告げる。

卒業生と時を同じくしてこの春キャンパスを去るのは ◇経済学部が鶴田俊正教授、松浦利明教授 ◇法学部が西川利行教授、林茂教授、前田政宏教授 ◇経営学部が井上裕教授 ◇商学部が武田昌之教授 ◇文学部が相川治子教授、伊部哲教授、後藤暢教授、西川正雄教授、畑有三教授、米地實教授の皆さん。このうち5教授が、最終講義を行った。西川利行教授からは、思い出と学生へのメッセージをいただいた。



ゼミOBから花束を受ける松浦利明教授

松浦利明経済学部教授は12月18日『『農業問題』研究のあゆみ』と題して講義。明治期からの日本の農業が、その後の資本主義の進展、経済のグローバル化によって、どのように変化し、問題点を残したかに論じた。

同日行われた井上裕経営学部教授の「日本の銀行—その栄光と悲慘をめぐって」と題する講義では、日本の銀行が直面している不良債権の問題を中心に、地方も含めて今後金融機関の経営再生のために何が必要なのかについて持論を展開した。



最後の講義に紅潮の面持ちの井上裕教授

鶴田俊正経済学部教授の講義は12月22日「産業再生の行方—経済システム・企業システムの課題—」と題して行われた。日本の企業は、いま大きな転換期に直面しているが、その中で伸びている企業と低迷する企業の違いに論及し、克服するための課題を提起した。



校歌斉唱に感無量の鶴田俊正教授

明けて1月9日、畑有三文学部教授は「文学研究の要諦」と題して講義。漢文や文学論、古今の名作を音読、解説しながら作家の真髄に迫り、また作品を深めるために導入される「対比」の手法について論じ、文学の奥深さを存分に語った。



歴史学の面白さを語る西川正雄教授

西川正雄文学部教授の講義は1月10日「歴史学の醍醐味」と題し、明治期からの、幸徳傳次郎(秋水)ら日本の初期社会主義者の活動について、長年の追跡成果を紹介。歴史学の面白さは、史料の発掘と検証によって、新たな事実を浮かび上がらせ、定説を批判することにあると述べた。

各教室には学部を超えて多数の学生・卒業生が詰め掛け、別れを惜しんだ。鶴田教授の講義には、長年にわたり指導を受けたグリークラブの部員が駆けつけ、最後に「専修大学校歌」を斉唱。教室は感動に包まれた。



学生たちと記念撮影する畑有三教授

## 私と専修大学

全一調和、統一力的に生きよ 現職を辞するに際して

法学部教授 西川利行

時代は21世紀に入り、国内外を問わず新たな社会秩序に向かっていると言えよう。専修大学は歴史的に実在し、脈々として時代の激変

の流れに棹さひ息吹いている。

私は戦後間もない1952年(昭27)に入学以来、本学に引き添うて52年の歳月を経ようとしている。顧みると、それは私の人生そのものであった。

在学中は、学生諸君が記念すべき入学式および卒業式には、在外研究期間を除いてすべて参列し、各年度の新生を迎え、卒業生を見送った。

だが、今回は我々にその別離が巡り来て、誠に感慨無量を覚えるものである。「歳月人を待たず」。大学における教育研究の実践がいかに難しいかを、今にして強く感懐している。

現職を辞するに際し、本学すべての構成員の方々に感謝を述べると共に、卒業される学生諸君には「人間は生命力(エネルギー)」である。生きるべきときに生きる。しかも、全一調和、統一力的に」という言葉を送りたい。

【ニュース専修3月号2面】